

---

**土屋訪問介護事業所は、  
知的障がい者、ご家族に、  
「第三の選択肢」をご提案いたします。**

---

## ■はじめに■

---

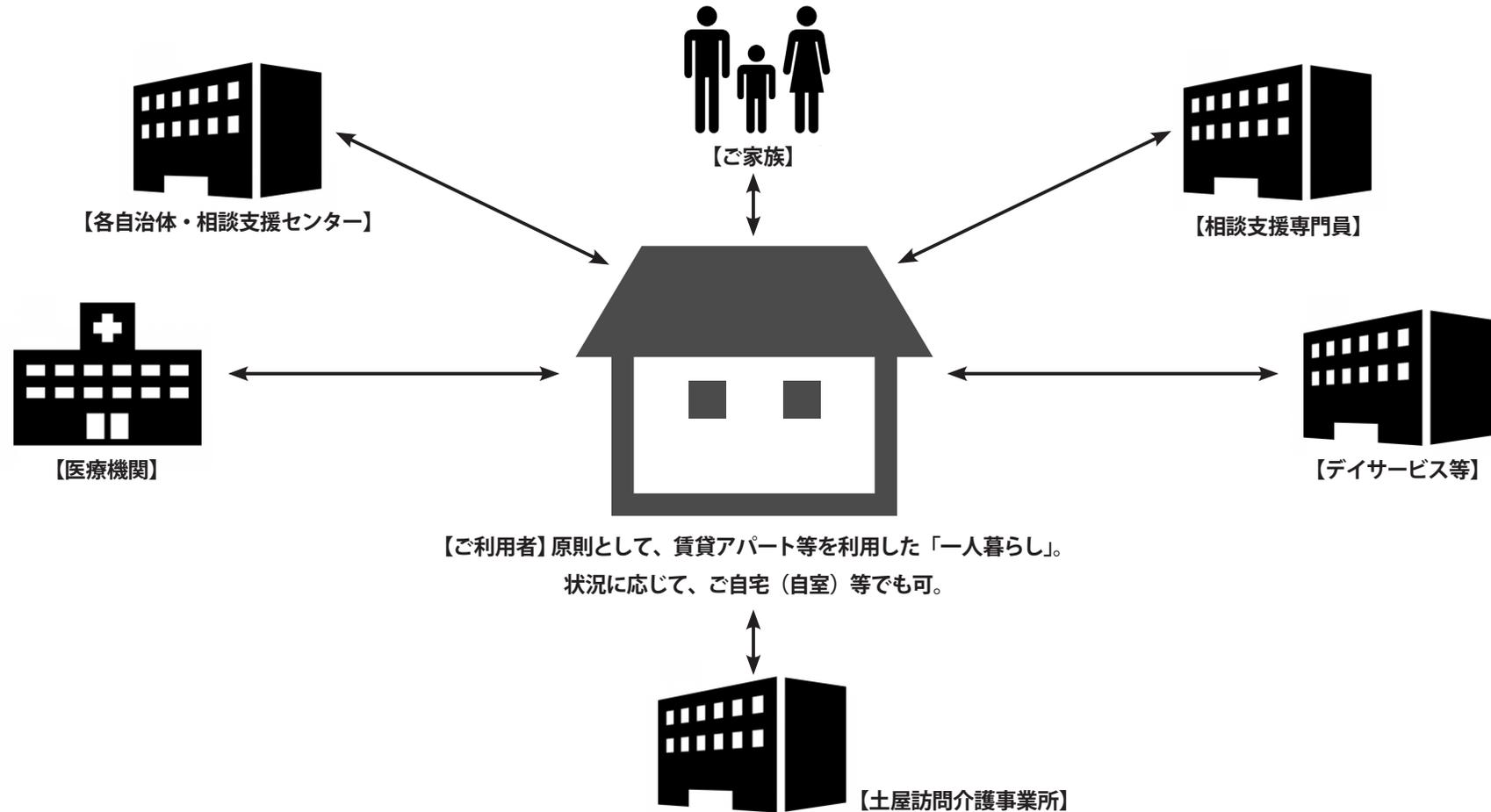
過去から現在に至るまで、知的障がい者が、社会生活を滞りなく送るためには、  
下記の二つの選択肢が一般的です。

1. ご家族による、自宅介護
2. 病院、障がい者福祉施設への入所

私たち土屋訪問介護事業所は、上記の他に「第三の選択肢」を提案し、  
支援を実践し続けています。

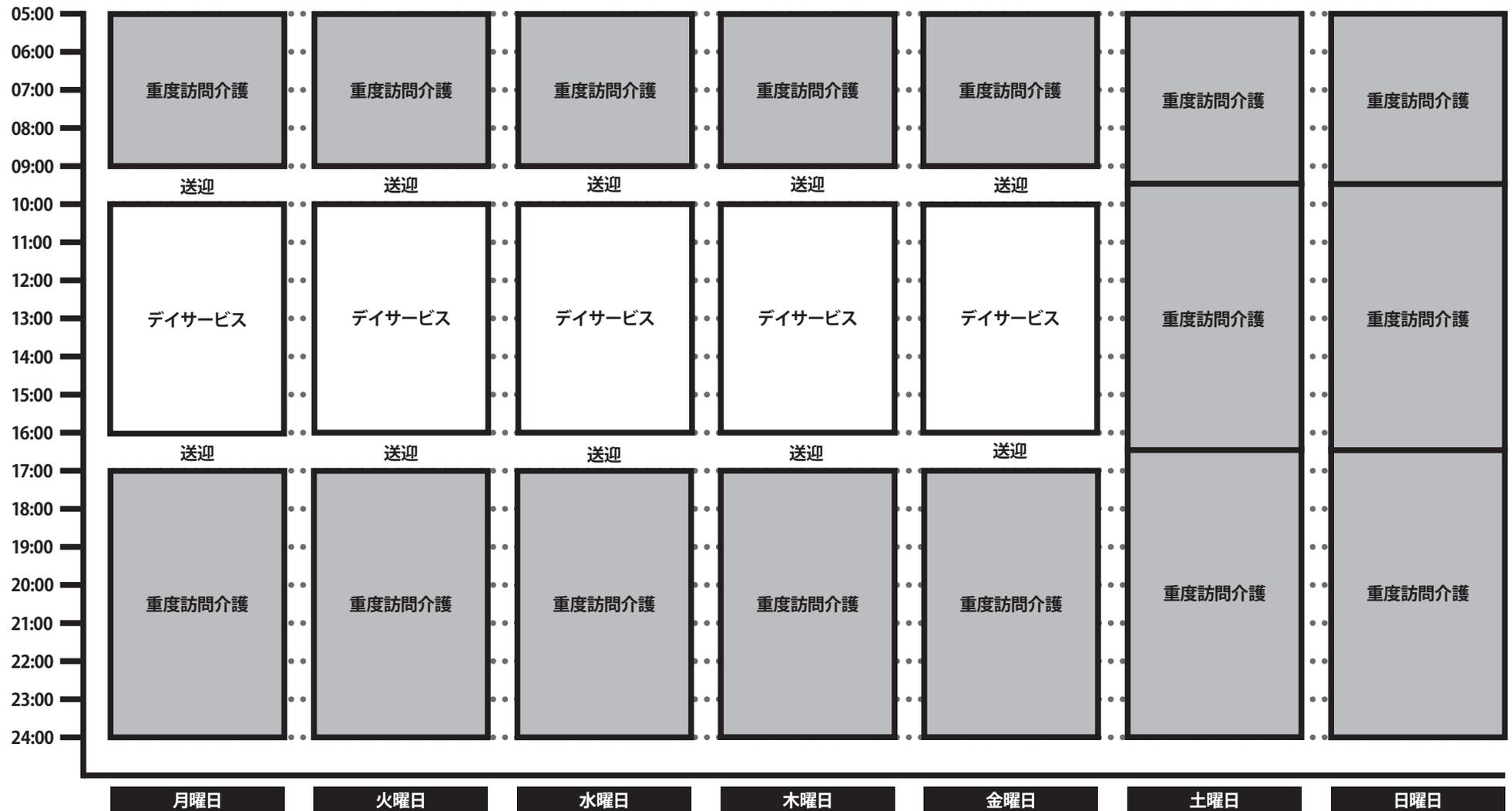
---

## ■土屋訪問介護事業所が実践する「第三の選択肢」■



土屋訪問介護事業所が実践する「第三の選択肢」とは、重度訪問介護を利用した、知的障がい者の地域生活をサポートするプログラムです。日中の時間帯は、デイサービス等に通所し、夕方から朝にかけての夜間帯は、重度訪問介護を利用して土屋訪問介護事業所が見守りを行います。また、ご家族をはじめとした各関係機関との連携もサポートいたします。

## ■標準的なスケジュール■



日中の時間帯は、デイサービスの利用ばかりではなく、ショートステイ等を組み合わせることで、生活に変化と刺激を与える場合もあります。  
 例えるなら、日中仕事に出かける（デイサービス）、仕事が終わって自宅でくつろぐ（重度訪問介護）というイメージです。

## ■ご利用者 A 様のケース■

### ●利用者プロフィール

20代・男性 障害支援区分6（強度行動障害）

#### 【支援に至る背景】

小・中学時代より教室からの飛び出し、トイレの閉じこもり等が見られたようです。中学卒業後は、グループホームや生活介護による支援を受けるものの馴染むことができず、ご家族による支援へと変更。とはいえ、ご家族の支援にも限界があり、「第三の選択肢」へ一縷の望みをかけていただいた。

#### 【A 様のパーソナリティ】

笑うことが好きで、他人に対し親切な心を持つ朗らかさがある一方で、自らの負の感情を適切に処理することができず、時として感情が爆発してしまうという極端な側面も有しておられます。

利用者が、ヘルパー等の支援従事者に望むことは、密な信頼関係を基にした「遊んでくれる相手」「甘えられる相手」といったいわば「依存できる存在」であると思われます。

### ●土屋訪問介護事業所の取り組み

精神状態が安定している際は、冗談を言い合いながら思っきり笑い合う時間としています。また、常に「かまってくれている」という思いが、利用者ご本人にとって何よりの安心感につながるため、私たちは常に利用者を見つめ、利用者の視界から外れないということを徹底的に意識しています。

しかし、不穏に陥るトリガーが第三者には理解不能なことも多く、突然不穏のスイッチが入る場合も多々あります。こうした場合、話題の転換を図ることで「不穏をかわす」ことを心がけています。

とはいえ支援開始当初は、突然入る不穏のスイッチにヘルパーの対応が追いつかない時もありました。しかし、支援開始後半年以上の時を経て、利用者ご本人から「今、イライラしている」「パニックになっている」と、不穏につながりかねない負の感情を、利用者自身が第三者に伝えることができるようになってきました。こうしたことは、日頃から「イライラした時は教えてね」と、対話を続けることでようやく利用者の意識に備わることができた成果だと捉えております。

## ■ご利用者 B 様のケース■

### ●利用者プロフィール

20 代・男性 障害支援区分 6（強度行動障害）

#### 【支援に至る背景】

特別支援学校時代から障がい者支援施設に入所していたが、病気の罹患を契機に不穏状態となる。精神科病院の入退院を繰り返した後、医療型短期入所と障がい者支援施設の短期入所を 3 ヶ月ごとに交互に利用していた。ご家族の「安心できる環境の中で、充実した福祉的ケアを行ってほしい」という意向を受け、土屋訪問介護事業所による支援がスタート。

#### 【B 様のパーソナリティ】

発語なし。咀嚼・嚥下が万全ではないため、食事はペースト食が基本。食事介助、排泄介助が必要。リハビリパンツとパット着用。集中力に欠け、立位・座位での排泄処理が難しいため、排便時は風呂場にてシャワー浴を実施。人懐っこい性格のため、大人数のなかにはストレスを感じないようです。積極的に話しかけたり、抱きしめられたりすることで安心感を得るようです。幼少時よりつま先立ちで歩行されているため、転倒には最大限の注意を払う必要があります。

### ●土屋訪問介護事業所の取り組み

日中デイサービスを利用しているものの、通所日数が限られているため、原則として重度訪問介護による 24 時間介護を実施。

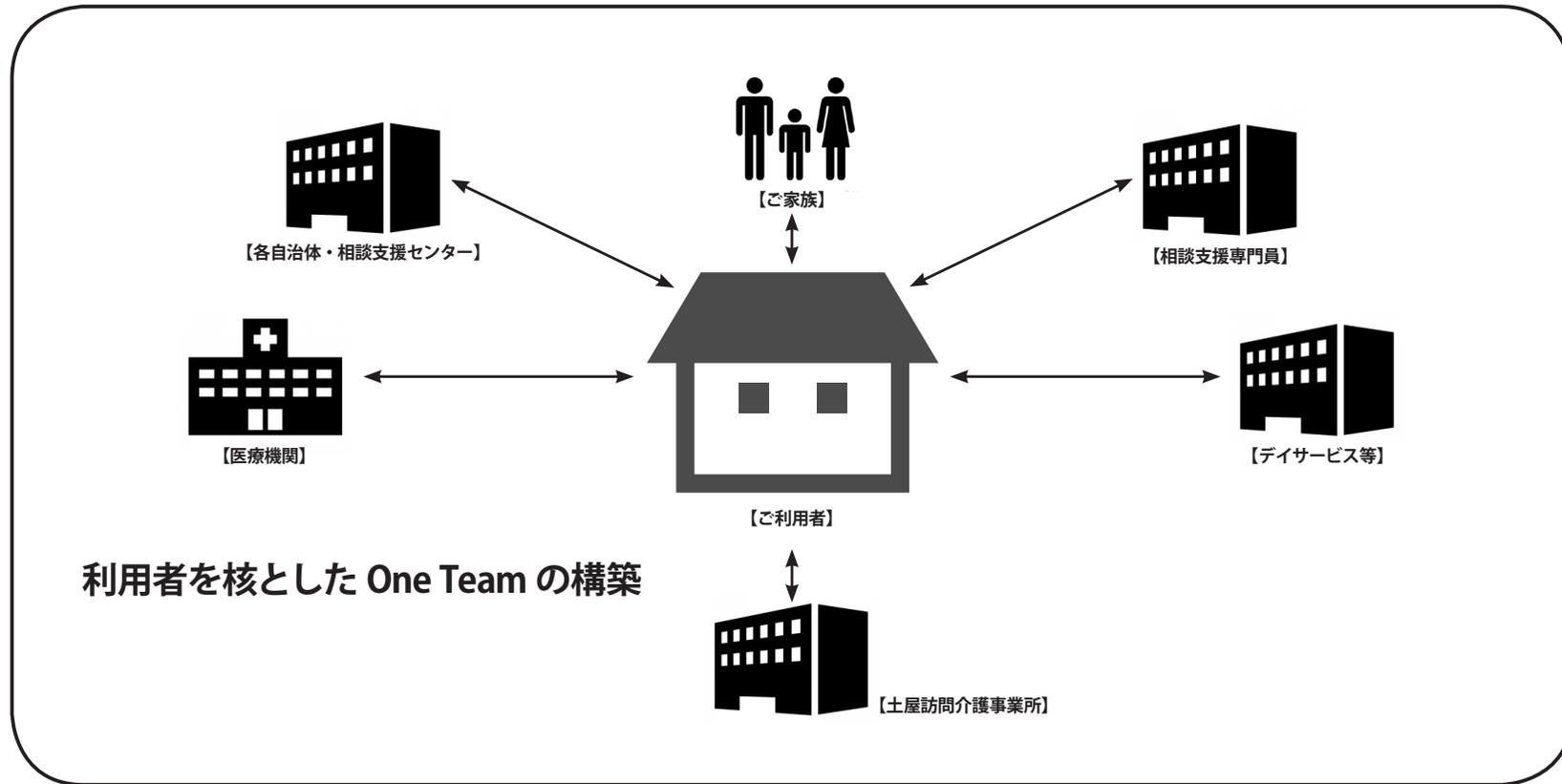
利用者にとっては、「自分を見てくれている」という安心感が精神状態を穏やかなものとする基本であると捉えています。平穏な精神状態の際は、ヘルパーとともにソファーに座り、テレビを観たり、CD で音楽を聴いたりという過ごし方。しかし、穏やかな時間が過ぎる場合も多々ある一方で、不穏時には奇声をあげ、服を脱ぎ、リハビリパンツも脱ぎ放尿。裸のまま部屋中を動き回られます。B 様の場合、不穏につながるトリガーは、3 つあります。それらは「空腹」「便秘」「その他」に分類することが可能です。

「空腹」……重度訪問介護を利用する以前は、病院や福祉施設に入所。当時からペースト食が基本であったため、咀嚼が万全ではなく、いわゆる満腹中枢が刺激されにくい状態が続いていました。そのため常に空腹感を感じていたと思われます。土屋訪問介護事業所による支援開始から、パン食や刻み食（1 ミリ角）による咀嚼のトレーニングを実施。食事介助では、常に咀嚼・嚥下を確認し、誤嚥が起きることがないように最大限の注意を払っています。

「便秘」……ラキソベロンを活用した排便コントロールを実施。1 日 1 回の排便を目指しています。

「その他」……「空腹」「便秘」以外にも風邪などの体調不良や、24 時間居室内での介護という閉鎖空間への不満などが不穏のトリガーとなる場合があります。体調管理は、最低でも一日一回の体温・体重測定を実施。体調不良が認められる場合は、ご家族・医療機関と連携しながら、最適な措置を講じています。また、閉鎖空間への不満などは、散歩の実施や遊び方の工夫で乗り切っています。

## ■土屋訪問介護事業所の強み■



土屋訪問介護事業所では、支援開始前の「初期設定」を重視しております。  
このことを通じて、「どのような支援を実施するのか」「どのように関係機関と連携していくのか」「情報共有はどのようにするか」等について  
事前に積極的な意見交換を行い、支援開始後も、徹底的な情報共有を基に、  
利用者を核とした全ての関係機関が「One Team」として機能していくためのサポートを実施しています。

---

## ■おわりに■

---

公開資料としては開示できない内容もございます。  
私たち土屋訪問介護事業所は、それぞれの方の障がい状況や、  
ご家族のご事情などもしっかりと理解したうえで、  
自治体、相談支援センター、相談支援専門員、医療関係者の皆様と緊密に連携し、  
最適な支援プランを、ともに考えていきます。  
なお、本資料でお伝えした内容は、知的障がい者ばかりではなく、  
脳性麻痺、頸椎損傷などの方々への応用も可能です。  
土屋訪問介護事業所では、さまざまな事例も有しております。  
ご不明点などがございましたら、いつでもご相談願います。

---